

---

weed sky, weed revenge

すねいく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

w e e d s k y , w e e d r e v e n g e

### 【ZPDF】

Z9281F

### 【作者名】 すねいく

### 【あらすじ】

田代ひろいじめを受け続けていた翔、誠司、彩香は結束し、自分達の未来のために復讐を誓う

## 始まり

### プロローグ

2011年7月24日日曜日

「や、迎えに来たよ」

目の前に立つかつて共に”戦争”を企てた戦友。

「フフ。久しぶりね」

その横に立つ、幼馴染にして戦友。

ああ、久しぶりだ。

久々のシャバの空気。・・・うん、悪くない。

自然と笑みが浮かんでくる。

「久しぶりだな、誠司。彩香」

こうして2人を見ていると高校生のあのときの事が蘇つて来る。

2007年6月28日土曜日

楠見第2中の体育館裏。

俺はいじめを受けていた。

「なあ、ほかに何か獲物もってねーか?腹を思いつきり蹴り飛された。」

正直・・・痛エ・・・。

「おら・・・よつ!」

何かの棒で背中を殴られた。

もう痛みをあまり感じない。・・・。

「なあ、こいつ反応無くなつんだけど」

「そつか、じやあ、帰るか」

そのまま、奴らは去つていった。

正直・・・、動けね・・・。

「大丈夫！？」

誠司か・・・。

「まあ・・・、なんとか」

「ちよつと待つて応急処置するから」

別にいらぬ・・・。

ああ・・・。殴られていただけだが、これではつきりまとまつた。

俺が立ち上がるのに合わせて誠司も立ち上がつた。

「翔？」

俺は常々思つていた事を口に出した。

「え、復讐？本当にするの？」

何を疑問に思つてこゐるのだろう。前にも話したことがあるだろう

に。

「うん・・・。僕も協力するよ」

「ああ・・・。これからは俺たちの時代だ・・・」

いつの間にか傷口の痛みを忘れ、ただ、興奮するばかりだった。

## 始まり（後書き）

初めての作品ですので、何かおかしいところがあるかもしれません  
が・・・、そのときは指摘していただき結構です。その方がう  
れしいので

## 距離

2007年6月30日月曜日

大きくも無く、小さくも無く。裕福でもなく、貧乏でもない。  
それが、俺の家。

俺の家のすぐ隣には幼馴染の彩香が住んでいる。  
小さい頃引つ越してきた時に彩香と出会った。  
一階の自分の部屋を決める時も彩香の部屋の横を選んだのだ。いつでも話が出来るように。  
その頃は純粋に、彩香という友達が好きだった。

田覚まし時計がやかましく鳴り響く。

ああ・・・、毎度毎度つるせー・・・。

だつたら初めからセットしなければ良いだけの話なのだが、それでは朝起きる事が出来ない。

田覚まし時計を止めて着替えを始める。

痛ツ・・・。

服を脱いで体を見る。

あいつらも慣れているのが、痕が残っているのは腹や背中だけで顔などの田立つところは痕が残っていない。

その方が俺としても楽なんだがな。

「・・・と、早く着替えないとな」

誰かに言つわけでもなく、とりあえず声に出して自分を促すつて、痛いって！

「やつほー、翔。どうしたの？」

軽くうずくまつてると窓のほうから声。

彩香か

「いや、なんでもねえよ」

「ホントに？随分と痛がつてゐるよう見えたけど」

卷之三十一

「ほら、どうもお食介炊きのいふが、  
それより、着替えだつて。

がんでもねえで、それから着替えがきく行性ないしこれ

「んー・・・、まあね。・・・休みたいけど・・・」

「 」

卷之三

なつでもない一じふれ

変な奴……とにかくあれど着替える

痛いのを我慢しつつ、着替えて一階へと降りる。

重い。 風を涼し 先づ川へと着く

重い

それがい（モ思）（感想）

両親の仲は特に悪いわけでもない。

両親との仲も特に悪いわけでもない

ただ、最近父親の様子がおかしい。

その所為もあるのだろうか、朝食時の空気が非常に重たい。

さつさと食べて学校に行こう。

大きくも無く、小さくも無く。

それが、私の家。

私の家のすぐ隣には幼馴染の翔が住んでいる。

小さい頃引っ越してきた時に翔と出会った。

一階の自分の部屋を決める時も翔の部屋の横を選んだのだ。いつ

第一回 おとぎの話

その頃は純粋に、翔という友達が好きだった。

うつすらと目を開く。

まだ田覚ましが鳴る時間にはなっていなかった。

この所随分と早く起きちゃつた。

する事も無い。一階で寝てるお父さんもお母さんもまだ寝てるみたいだつた。

とりあえず顔を洗つて、着替える。

ここに汚れ、まだ取れてなかつたんだ。

いつの間にかセーラー服についている汚れ。

日に日に酷くなつてゐるし、いつまで隠し通せるかな・・・。

どうせこのまま寝る事も出来ないし、制服をきれいにしよう、うん。

小さな汚れをふき取り、糸のほつれがあれば裁縫セットを使い、少しずつ時間が過ぎていつた。

ふと隣の家で田覚ましの音が鳴つた。

翔かな?

カーテンを開く。翔の部屋は窓は開けてるくせにカーテンは閉めてる。

何するのか見物でもしよう。

何気なく見ていたが、普通に着替えているようだだつた。

ただ、痛がつてゐる点を除いては。

声をかけた。

案外普通に返答が戻つてきた。

一、二会話をして互いに部屋に戻つた。

私のこと、気づいてくれたら良かつたのに。

私が苦しんでいるつて気づいてくれた良かつたのに。

でも、翔も私と同じように苦しんでるんだよね。

それに耐えてるんだよね。

見ればわかる。

だけど、見ればわかるのに、どうして互いに気づきあつて出

来ないのである。

無理なことと判つていても悲しくなつてきて涙が出てきた。

どのくらい時間が経ったのか、気づいたらいつも家を出る時間になっていた。

行きたくない。

正直に言つて、行きたくなかった。

お母さんの急かす声が聞こえたので、とりあえず着替えて顔を洗つて歯を磨いた。

「それじゃ、行つてきまーす」

「あれ?」飯は?

「時間がないからいらぬ」

そういって家を飛び出す

「彩香、最近様子が変なのよ

「そうなのか?」

「制服が変に汚れてたり・・・、いじめでも受けてるのかし

「

「ふとした拍子に汚したんだる。お前は気にしそぎだ」

「そうだといいけど・・・」

そんな会話が家でされてる事にも気づかずに。

あれ? 翔?

私が家を出るちょっと前に翔も家を出たのかな。

そう思い、近づいて声を掛けようとする。

あれ・・・。どうして足が動かないんだろう。  
近づきたくても近づけない。

あれ・・・。どうして声が出ないんだろう。  
声を掛けたくても掛けられない。

あ、そうか。

気づいた。

気づいてしまった。

私は気付き合えなかつた事で今まで以上に翔との距離を感じたんだ。

翔は何も悪くない。

何も話さずに分かり合いつことなど無理だと判つていいのよ。

声を掛けるのを諦め、トボトボと歩き出す。

頬を温かいものが滴り落ちる。地面上に斑点を作つていく。

あれ?なんだろう?

どうして泣いているの?

だめ・・・、止まらない・・・。

そのまま回りを気にせず大声で泣いた。

騒ぎを聞きつけたのか、少し先を歩いていた翔が走り寄つてきた。  
必死に声を掛けてくれる。でもその声は私には届かない。  
いや、私が拒否してる。

だめ、これ以上翔に優しくされるわけには行かない。  
逃げ出したい衝動に駆られた瞬間、私は走り出した。  
どこでも良い。どこでも良いから。翔が来ない場所に。

とりあえず俺は何もしていない。それだけは確信を持つて言わしてもらひう。

はつきり言つて、どうして彩香がいつの間にか後ろを歩き、いきなり泣き出したのかわからない。

慌てて駆け寄つたは良いが、どこかに逃走。

・・・俺が悪いのか?

ああ、やばい。早く学校にいかねーと。

顔を見れば判る

2007年6月30日月曜日

彩香のことを少し気にしながら楠見第2中の校門に入った。  
電車がつい先ほど着いたのか、最寄り駅から学校までは通学者の  
嵐だ。

鬱陶しいなあ・・・。

とりあえず、玄関に入ろうとする時。

「お、翔じやん」

ん、この声は。

「誠司じやん、おはよー」

「うん、おはよう」

それより、誠司がこの時間帯にいるって事は・・・、「なあ、あいつも近くにいてるんじゃないのか?」

「うん、いるよ」

「こいつあつさりと言いやがった・・・。

「でも大丈夫大丈夫。こんな人気の多ことひりで出しあしないつ  
て」

「そうだと良いけどな。

少し気につつも玄関で靴を履き替えようとする。

「よお、久しぶりだな。もう大丈夫か?」

ゾクツ・・・。

「よう、久しぶりですねー」

またこいつか。今までの事が思い出してくる。  
早く立ち去りたい。

「今からちょっと時間あるか?」

時間無くとも連れて行くだろうが。

とりあえず巻き添えが食わないように誠司を先に行かせた。

「45分からホームルームが始まるだる」

靴を履きながら答える。

さて・・・これからどうじみつか。

「俺ら『ゴーゴーセー』だぜ？多少の遅刻は何もいわれねーよ  
ああ、やつぱり意味が無かつた。

周りを見渡す。

薄情なやつらばかりだ。

巻き添えを食らいたくないのは誰でも一緒か。

しゃーねー。そこにはいる人影も気になるし、ここに付きました  
やるかー。

「ああ、良いぜ」

「へえ、今日はこいつになくやる気があるじゃねーか

「たまには、な

真っ向から受ける気なんて無いけど。

「今日は体育館裏に数人ほど呼んであるからなあ。こうなるなら  
もう数人連れて来たら良かったよ

」といつ卑怯過ぎだろ。

「ま、お前なら一人でもすぐこノビちまうだらけだな  
だったら初めから連れて行かなれば良いだろ。他のやつを探せ  
よ。

「おら、着こてこいや

仕方ない。せこい方法はあまり好みじゃないが、

「判つたよ

さり気なく後ろに回られたな。やつぱり逃げるとか無理かな  
なあ。

と、相手が俺の後ろに立てるところとまゝ、普通俺は逃げられないと想つ。

つまり、それを逆手に取れば、普通俺は逃げられないわけだから、  
相手は油断してる確率もある。

さつきの態度を見てても、俺が逃げないと思い込んでそうだし。現に今まで逃げたことはほとんど無いからな。

「なんて・・・。素直に行くと思うか、アホが！」

一言罵倒し、即座に逃げる。

奴も咄嗟の事だったようで一瞬隙が生じた。

目指すは、信一の下へ。

さつき靴箱から見かけた人影は信一のものだ。

「待てやあ！」

ああ、くそ。

少しづつ詰められてる。

あと少し、あの曲がり角。

何とか曲がり角を曲がり、信一とすれ違う。

俺は無視して階段を上がって上に駆け上がる。

このまま上に行けば俺のクラス。

誠司もいてるはず。

ふと、駆け上る際、下を見ると、  
こけたのか、起き上がつてからじみらを睨み、辺りに当り散らしてゐる。

小さい人間だなあ。

なんて思いながら、信一を探した。

こかしたのは信一だろうが、信一がいてないってことは、うまく逃げたのだろう。

まだホームルームが始まる直前といつて廊下に出てる生徒も多い。

助けてくれたお礼に後でジュースでもおじつてるやるかな。

教室に入った俺がまず田にするのは教室の後のほうで遊んでいる奴ら。

時間は8時40分。

遊んでいる・・・いや、これもいじめだろう。

片方は楽しんでるが、もう片方はどんな風な見方をしても楽しん  
でるようには見えない。

席に着いて鞄から午前中に使う教材を机の中に放り込んだ。

8時45分。先生が来てホームルームを始める。

「ホームルーム始まるから早く席に着け。特に後ろで遊んでる奴

ら」

先生、あれが遊んでるよう見えるんですか。

いじめられてた奴は席に戻ろうとするが、いじめてる側はそれを  
許さない。

先生の忠告はあまり意味がないみたいだ。

先生もそれ以上はあまり咎める気がしないのか、それ以上は言わ  
なかつた。

朝の報告を適当にやつてそれで終わり。

職員室に帰つていた。

所詮はこの程度。何の役にも立つてない。

中には良い先生もいてる。面倒見の良い先生や、正義感の高いよ  
うな先生。

でも、大半は給料だけをむしりとるような先生だろう。

ただすることだけして終わりつていう先生はそんな言われ方を仕  
方ないとと思う。

授業が始まるのは9時から。

まだ時間もあるから暇なわけだが。

「翔。あの後大丈夫だつた?」

「おお。何とか撒いた」

「すごいじやん。どうやつたのぞ」

「そうだな、それについてはまた追々話すよ。俺はちよつトイ  
レに行つて来る」

「もつたいぶるなよな。じゃ、行つてらっしゃい」

誠司は信一の事知らないし、後で言った方が面白そつだ。

ちなみに、この棟には男子トイレは1個しかない。

1階と3階は女子トイレ。2階に男子トイレ

横の藝術・ケテア関連の教室のある棟には逆の配置

男子エイジで、娘は会わなければいけない」と  
ハニの呟きである。半の時、母の前のハニ

「お前体育館裏に連れてくるって言つてたじやねーか」

「わらいわらい。逃げられてよ」

「つたく。おかげで俺ら、無駄に遅刻して減点対象になっちまつ

た  
よ

「悪が二たてで、次は連れてくるからよ」

おまえも期待してるので

國語文法

「あぶねえ

思ひがいへば

人違ひだつたら良いけど、あの後姿は絶対に奴だ。

ちなみに俺は名前を知らない。聞く機会も、耳にする機会もない。

からだ

別は知りがくもないけれど

そぞ思ひがかり  
千尋空立を云  
かく思ひ  
上木を廻ける

卷之三

• • • • • • • • • • • • • • • •

卷之二十一

何でバレてんの！？

いや、マジで。えーと、なんで? どうあえず田が合つたから閉め

てみたけど。

他の奴らは居なかつたみたいだけど

二〇一九年

「おら、開けろや」

時間を確認、55分。まだ時間あるな。

ああ、くそ。最悪だ。

何でバレたんだろう。

いや、そんなことは今はビリでもいい。

もう一度開けてみる。

「・・・・・」

やつぱりいるよね。

「・・・・・・・・・」

バタンッ

「てめっ！」

俺の身軽さをなめるなよ。

便器の上に足を掛けて、隣の個室に乗り移る。上に隙間が開いてある所に体を刷り込ませる。

よし、何とかいた。

「あん？ 隣に移ったのか？」

やべ、勢いよく・・・開ける！。

バタンッ！

「いつてえー！何すんだ！さつきといい・・・シツッ！」

鼻は痛いだろうな。狙い通り。

ドアを思いつきりぶつけたのが利いたのか、追つてくる仮配も無く、俺はそそくひと逃げ出した。

ああー・・・、結局俺は何のためにトイレに行つたんだ？  
余談だが先生が来る直前に席に戻ることができた。  
もちろん誠司には言つていない。

昼休憩。12時20分

「翔。昼ごはん食べよう

「ん。ああー・・・、そうだな」

「どうしたの？」

「今日は俺、学食だから」

「どうか、ここにいると奴がいきなつてきで怖い。」

「僕もそうだよ。じゃ、行こうか」

「そうか。行くか」

芸術・クラブ棟の方へ行き、1階にある食堂へと向かう。また、そこでもいじめは普通に行われてる。歓声を上げる者もいるが、大半はそこを避けて、食事をしていたりする。

「居心地悪いな」

思わずつぶやく。

誠司もあまり良い気分はしないようだ。  
適当にパンを買って、食堂を後にする。

・・・が、いじめられてる対象を田に入れてしまった。

「信一だ・・・」

「え、誰？」

ジュースをおひいてやるって言ってたからな。

「ちょっと先に中庭に行つてろ」

「うん? わかった」

500ミリペットボトルのジュース。

フルーツの類のもので、ちょっとズッシリとしてる。

信一の場所は・・・、あそこか。

いじめっ子は・・・、一人だけ、あそこか。

「あの時の借り、今返す・・・ぜつ!」

ペットボトルを投げる。寸分違わず狙い通り。

頭に命中。

数瞬停止してる内に俺は逃げる。

中庭に向かうか。

「翔お帰り。結局なんだつたの？」

「すぐわかるよ。仲間が居ないと不安だろ？」

「そろそろ信一が来てくれてもいいが。

「食べようぜ」

「そうだね」

と、食べて知らばくしない間に、信一が来た。

「来た来た」

「こんなところに居たのか、さつきはありがとな」

「なあに、今朝のお礼だよ。ついでにそのジユースもな」

そう笑いながら話してると、

「ねえ、誰？さつきの信一って人？」

誠司は知らなかつたな。

「そうだな、なんていうか……」

一拍おいて、

「信一であり……、俺たちの新たな同士つてどこの？いや戦友  
か

言つた。

誠司の驚いてる顔面白いなー。

「今更そんな驚く必要も無いだろ。2人だけでやつていけるわけ  
無いんだし」

「そうだけど……。何で言つてくれなかつたの？」

「昨日仲間に入つたんだよ。今朝言おうとしたけど、『たごたが  
あつたからなあ』

「そう……か」

すぐに言わなかつたのは悪いとは思つが、今はそんなことを言つ  
てる場合じやない。

俺がずっと気にかかつてていたこと、今朝の彩香の様子。  
学校に行けば必ず会えるはずだ。

時計を確認する。12時35分。

昼休憩終わりの時間は12時55分。

後20分。

「悪い。これから用事あるから先出るわ」

「え、僕たちも一緒に行こいつか？」

「いや、一人でいい」

「わかつた。気をつけて」

「ああ、お前らもな」

恐らくこの時の顔は怒っているような、悲しそうな、そんな表情をしてたと思う。

教室棟に戻る。

目の前にある、1年の教室

彩香の教室は1年1組だつたな。

教室を見渡す。

あれ？ いない。

「なあ、彩香どこにいるか知らないか？」

ドアの前に立っている女子に話しかけた。

「彩香・・・? 今日は来てませんけど」

「は? 来てない? そんな事はないだろ」

「いえ、今日は来てませんけど・・・」

どういうことだ。

「あの、あなた、中島翔さん?」

「そうだけど」

「はじめまして、私佐島聰美と言います」

「はあ・・・」

「ちょっとこっちに・・・」

なんだ? つていうか、何で俺のこと知ってるんだ

「彩香、いつも他の女子にいじめられてるんです。やつてる事は小さいことなんんですけど、落書きや、靴を隠したり、輪ゴムを飛ばしたり・・・」

「・・・」

「彩香も反抗したら余計に危なくなるって判つてるのか、何もし

なくて、でも、ずっと続けられて……

あ・・・、やつぱり

「私も下手に手を出す」と出来なくて……

「知ってるよ」

「え、どうして？ 親にも、誰にも言つてないって彩香が……  
そんなことは簡単。

「そんなの、彩香の顔を見ればわかる。小さい頃からずっと一緒にいたんだ。確証付けたくて今日はここに来たんだがな……」

「そうですか。翔さん、彩香がいつも話すとおりの人ですね」

彩香が？

「今いらないんだつたら仕方ないや。また出直すよ」

「はい、また来てください」

手を振つて別れた。

ひとつ判つたこと、

彩香が学校に来ていない。

今朝は一緒に……、つていつ表現はおかしいが、学校に向かつていたはずだ。

やはり、あの後どこかに行つたのだろうか。

教室に戻ると、誠司は読書をしていた。

適当に誠司に話をし、誠司の制止を聞かずに教室を飛び出していった。

靴を履き替える。

玄関に出ようとすると、

「てめえ！あの時はよくもやりやがつたな！」「  
げつ。何でこいつがいきなり出てくるんだ！」

「うるさい！今はお前なんかに構つてる暇は無いんだ！」「  
あんな奴無視。つていうか、おとといの傷は癒えてないんだ。話  
したくも無い。」

「ああ！？お前早退すんのかよ！」「

遅刻しても構わないって言つた奴に言われたくないねえ！

「じゃ、俺も早退しようつ

「なんでそうなるんだ！」

構つてられねえ。

走り出す。

「待てやつ！」

追つてきた。

構わざ走る。

しつけえよ！

そんなことより彩香が何処に居てるのか探さないと。  
どこか思い当たる場所・・・。

泣き出したのは家をでて間もない時。  
一番近くで良さそうな場所・・・。

ゲーセン？

いやいや、彩香はそんなところには行かない。

・・・公園。

小さい頃いつも彩香と遊んでいた公園。

「あそこしかない」

そこに向かおひと足を向ける。

ふと後ろを見る。

まだ追つてきてるよ・・・。

何とか振り切つてから行くか。

「ああ？スピードあげてんじゃねえ！」

「うるさいな！」

喋つても息切れが激しくなるだけじゃ。

「てめえ、待て！」

「・・・・・・・・・・・・」

無言を貫く。

「無視するんじゃねえ！」

「・・・・・・・・・・・・」

お前なんかに構つてられない。

「て・・・め・・・・。くそ・・・・。」

息切れか。馬鹿だろ。

その間に俺は全力で走り、振り切った。

そして、公園に着いた。

案の定、彩香を見つけた。

昼過ぎと言つ事もあるのか、公園には誰も居ない。  
もつとも、この時間帯に制服でうろついてたら補導の対象なんだ  
が。

何て言えば良いんだ。

何か気休めの言葉を言えば良いのだろうか。  
場を和ませようとしたら良いのか。

俺は

「彩香・・・」

声を掛けた。掛けずには居られなかつた。

## 公園

「彩香・・・」

誰かが私の名前を呼んだ?  
きっと幻聴よね・・・。

「彩香・・・！」

やつぱり聞こえる・・・。

振り向くとそこには・・・、

「翔・・・」

「どうして、元気?」

「お前学校行ってないだる。クラスのやつに聞いたよ、  
翔が、私のクラスに?」

「名前は何て言つたかな・・・。佐島、佐島聰美つて奴」

ああ・・・、サトちゃんか。

「何もしてやれなくて・・・、『めんな』

「それは、気づけなかつた事?『気づいていたら何か出来たって言  
うの?』」

自分でも思つくりい卑しき感情。翔は何も悪くないのに。どうし  
てこんな事を

・・・。

「何があつたのか」とくらい知つてゐるわ」

「そう・・・。サトちゃんが言つたんだ・・・」

どうして翔にそんなことを・・・。

あれ?私は翔に知つてほしいと思っていたんじや・・・。

知つてほしいのか、知つてほしくないのか・・・、自分でも良く

わからない。

「まさか。詳しい」とを聞いただけで、気づいていた。 . . .

彩香

じゃあ・・・、じゃあ、どうして・・・。

どうして、気づいていながら何も言ってくれないの。  
気づいていながら・・・、どうして・・・！

「彩・・・」

「うるさい！」

翔の伸ばしてきた手を払いのけた。

「どうして・・・？どうして、知っていて何もしてくれないの・・・。  
・？どうしてよ・・・！？私のことはどうでも良いの！？」

翔はも悪くない。翔に当たる何て・・・、ハツ当たりだ・・・。  
もういやだ、こんな自分・・・。

「ごめん・・・。翔はも悪くない・・・。ごめん・・・。  
不意に泣き出しあしまった。

ああ・・・、恥ずかしいところを見せてしまった。でも、今は構  
わず泣いてい  
たかった。

「彩香・・・、ごめん・・・」

手を差し伸べてくる翔、

「何かしてやりたかったけど、何か出来る自信が無かつたんだ・・・。  
・」

そのまま手を後ろに回して、

「ずっと前から気づいていたのに・・・、底つたりしたら俺も報  
復を受けるん

じゃないかって・・・

そつと、優しく、抱きしめてきた。

「そんな報復を恐れて何も・・・」

普段の私なら絶対に真っ赤な顔をして、動搖してたと思う。  
でも、今はそんな翔の行動が私をとても落ち着かせた。

「これからは俺たちが報復をする番だ

「どういうこと?」

「私たちが報復をする?そんなの無理に決まってる。

「同志を集めて、皆で仕返しをするんだ」

「仕返し・・・」

「ああ

「この生活から解放・・・」

「ああ」

「本当に、出来ると思ってるの?」

「正直、信じられない。」

「出来るさ」

「根拠は?」

「ええと・・・」

「ほら、すぐ詰まる。」

「いつも向こう側は数人に對して、こちらは一人だ。だったらこ  
っちは向こう

の人数を上回ればいいんだろう?」

なんて単純・・・。

「そんな連中は全国人何万人も居てるんだ。簡単に集まるさ」

単純だけど、出来そうな・・・。

でも、どうせなら・・・。

「うん、判つた。どちらにしても、このままひのひのはイヤだ」

出来るとこるまでやろう。

「ああ。ああ、こんなとこりで座つてないで、学校に・・・い  
や、サボるか

」

「そうだね」

「それにしても、天気が悪い。

雨が降りそう。

「雨が降りそうだし、どこか行くか」

「そうね

天気は悪いけど、折角氣分が晴れてきたって言ひ合ひの……。  
「やつと、見つけた」

「てめえ・・・

何でこんな時にこいつがやつて来るんだ。

「さつきはよくもやつてくれたな」

「うるさい。お前が勝手に追いかけてきて、息切れして、拳句、  
人を見失った  
んだろう？」

「うつせえ！お前に学校を飛び出したかと思つたら女と公園で  
会いやがって

！」

「それがどうした

「お前の所為で俺は先輩に怒られたんだよー！」

どうでも良いよ。

それにしてもこいつ・・・。

「なあ、お前、あの先輩らひとつのんでて乐しいか？」

「ああ？た、樂しいに決まってるだろー！」

やはり、どもった。

「お前、本当はあこづらから抜け出したいとか思つてゐるんだじや  
無いのか？」

俺、もしかしたら他の奴らもこいつから離れたことは無くなるか  
も・・・。

「うつせるやー！」

「ツテホー！」

クソッ・・・。普通こきなり殴るか。

「翔ッ！」

「こっちに来るな！」

彩香に巻き添えを食らわすわけには・・・。

「お前に、何がわかるんだ！」

「いつ、何を口走つて・・・。

「俺が好きで人をいじめてるよう見えるのか！」

「いつてえ・・・。でもな・・・、

「でもな・・・、ああ、見えるさ！お前が好きで人をいじめてるようにな！」

「ふざけるな！人を好きでいじめてるわけあるかあ！」

良かつた・・・。これが聞けたら後はこっちのもんだ。

これは・・・、雨か・・・。

ついに雨が降つてきやがつた。

「俺だつて、齎されて、人をいじめさせられてるんだよー！」

「だからつて・・・、俺に当たるなあ！」

「つつ・・・」

「お前の所為で、どれだけの人数が苦しんでると思つてるんだ！」

許せない。例えはさせられていたとしても、許せるわけが無い！

「お前が、あいつらの言うことを聞いていた所為で、一体何人の人が・・・！」

「イツテー・・・。わっかんねえよーそんなことー！」

「わからないだと？」

「わかってるだろー！お前が、お前が今されてることと同じだうが！お前もあいつらにいじめられてるんだろー！お前もよくわかつてるんだじゃ無いのかー！」

「・・・」

「テエ・・・。やつと殴るのを止めてくれた。

「そうさ・・・。俺が良くわかつてる・・・。でも・・・、俺に

何が出来るつ

て言うんだ！」

あつぶね・・・！

「確かに俺はあいつらを恐れていろいろやったさー・俺に選択肢があつたとでも言つのか！？」

「その選択肢！作つてやるよー！」

「なに・・・？」

「あいつらに報復するー！」

「報復・・・？」

「そうさ。何人も同志を集めて、全員で仕返しをするんだよ」

「そんなこと・・・。そんなことが、出来ると思つてるのか！？」

お前はあいつ

らを知らないからそんな事を言えるー夢見てんじゃねえ！」

「ツ・・・・！」

腹が・・・。

「所詮お前らみたいなのが何人集まつたとこりで・・・、報復なんざ、出来る

訳がねえ！」

頭が・・・、重い・・・。

「うる・・・せえ・・・ーやつてみるのが怖いだけだろ・・・。

一人で何でも

かんでも背負い込みやがつて・・・」

「・・・・・・・・

無言で殴るなよ・・・。腕が・・・。

「ハア・・・・。ハア・・・・。だから・・・、俺たちの・・・元へ・

・・來い！

あんな奴らにいつまでも付き合つ必要はねえーーつかく・・・、一歩踏み出せー

「

息が・・・。クソッ・・・。あともう少し意識が持てば・・・。

「今日は、」の辺にじといてやらい・・・・・

待てよ・・・・・。待てつて・・・・・。」で返事も聞かずに逃がすわ

けには・・・・・

「じゃあな。彩香・・・だっけ? そいつの看病しといてやつてくれ。勢いに乗

つてやり過ぎてしまつたからな

「え? うん・・・・・。わかつた

意識が持たねえ・・・・・

頭がいてえ・・・・・。」の辺は・・・・?

「あ、起きた? 翔

「彩・・・・香・・・・?

「そうだよ。すっかり良い天気になつたねえ

天氣? さつきまで曇つていたのに・・・・。

そういえば・・・・・。

「アツ! あの野郎は! ?

「え、どこが行つたよ? 何かあまり怖い人じゃない感じになつて

た

怖くなかった・・・?

そうか・・・・・。良かつた・・・・・。

ところで・・・・・、これは・・・・・。

「つて、膝枕?」

「うん」

・・・・・・・・・・・。

「どうしたの?」

「なんでもねえ・・・・・。もう少しこのまま居てて良いか?」

「うん。勿論」

どうせ、体もうまく動かないしな・・・。

「今、何時ごろだ？」

今5時になたね

「詩」

「あ、そろそろ」

「イツテエ!!」

「寝てなさい」

「はい・・・」

一  
5時つて事は、すつと俺寝てたのかよ

二ふきのて隨分と疲れたんだね

おかいがた

普通公園で一日の時間ひいてから二子共や親子連でが游びこ

來てるものじ

やないのか？

その事を言つてみると・・・、

元々は居たよ?でも、何か……私たちに氣を使つてか

を離れてた

卷之二

恥ずかしい

でも、今は大した事じやない。

今はとても・・・、

一清々しいな

二二二

## 報復（後書き）

すみません、激しく遅れてしまいました。  
言い訳としては、学業（あまりしてないけど）やクラブ（いつも  
は頑張ってる）で忙しいもので、体力が持っていませんでした。  
毎週日曜日あたりに投稿を目標としてますので、一応  
よろしくです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9281f/>

---

weed sky, weed revenge

2011年2月3日02時46分発行